

江戸時代の「犯人指名手配書」

JJ1SXA/池

「問われて名乗るもおこがましいが生まれは遠州浜松在…」、これは、歌舞伎「白浪五人男」の日本駄右衛門の口上で有名な台詞ですが、この日本駄右衛門のモデルとされる、「浜島庄兵衛」の指名手配書には、以下の記述がある。

…まず「せい」すなわち身長は「五尺八・九寸」といいますから175cmを超える大男です。

「顔は」というと「色白で面長、鼻筋は通り、目中細く」といいますから切れ長であったということでしょう。

「濃い月代に5cm程の引き傷」を見せていたといえますからなかなか凄みのあるいい男です。

さらに琥珀織りという絹織物を、ビンロウジュの果実を利用した染色法で赤みを帯びた暗黒色にした小袖を着て、丸の内に橘の紋所もを見せていたというのですから、人目を忍ぶ盗賊のスタイルではありません。

持ち物の鼻紙袋は萌黄色の羅紗(ポルトガル由来の厚地の毛織物)、印籠には鳥の蒔絵が施されていましたと、相当に目立つ伊達男のイメージです。

写真すらなかった江戸時代には、氏名・年齢・生国に続いて背格好や容貌、着物・所有品、しゃべり方の特徴などを言葉で列挙していく形式でした。…

以上は、「東京都公文書館の史料解説～江戸の人相書」より抜粋、転記したものです、浜島庄兵衛は、大勢の手下を率いて東海道筋を荒らしまわった強盗の首領だが、指名手配された翌年の延享4年(1747年)正月、京都町奉行所に自首し、江戸へ護送された後、3月11日、江戸市中引き廻しの上打ち首となりました。

現在の指名手配書は本人の写真が添付されるのはもちろん、変装パターンや「ふけ顔」の予測まで画像化して示されるようです、

本人の写真が入手できない場合、警察では、事件の目撃者から犯人の特徴を聞いて、似顔絵を作成します、この作成者は、似顔絵捜査官と呼ばれるようで、似顔絵捜査官になるには技能検定に合格する必要があるようです。

似顔絵の他にも、モニタージュ写真という犯人の顔写真があります、モニタージュ写真は、目撃者などの記憶によって合成・作製される犯人の顔写真で、顔の形や、目、鼻、口、耳、髪形などの各部分について、犯人に似ている写真を選び、これらを組み合わせて作るようですが、AI技術の発達した現在は、本物と寸分違わぬ写真が生成されるのでは無いでしょうか。

東京都公文書館 (<https://www.soumu.metro.tokyo.lg.jp/01soumu/archives/>) には、江戸期の史料も豊富に揃えています、時間を作って覗いてみるのも結構楽しく、克つ、勉強になってFBです。

(2024年4月記)